

『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長
—その3 『朝びらき丸 東の海へ』における正しき認識への旅—
前篇 ユースタスの自己認識¹

野呂有子

C. S.ルイスは'Of Three Ways of Writing for Children'において、子どもを基本的には自分(=ルイス)と変わらぬ感性をもつ「独立した人格」— 'independent personalities'—であること、子どもと自分を結ぶ糸は「共感」であることを明らかにして、我々に改めて文学研究の原点を指し示している。²

彼は、木の年輪と列車の運行の比喻を使って成長と変化を区別し、大人と子どもの違いを、その認識領域の広さの違い・視野の広さの違いであるとしている。³たとすれば、ルイスのいう「成長」とは認識領域を広げることである、という解釈が成り立つであろう。

さて、認識領域を広げる、という場合、二つの方向が考えられる。それは、内的認識と外的認識である。すなわち、自分自身を正しく認識することと、自分と自分以外のもの——自分をとりまく世界、及び、他者——との関係を正しく認識することだ。

『朝びらき丸 東の海へ』において、子どもたち——カスピアン、エドモンド、ルーシー、ユースタス——そして、ねずみ族の長たる勇士リーピーチーフは、カスピアンの部下とともに、「朝びらき丸」に乗って行方不明の七人の領主を捜す旅に出る。海を東へ東へと航海し、嵐にあい、未知の島々を探検し、海蛇と出くわしたりしながら、ついにはアスランの住む「この世の国」に到着する。このように、子どもたちは自分をとりまく外的世界への認識を深めながら、その一方で自分自身に対する認識をも深めていく。

子どもたちの認識過程を見て行くと一つのこと気づく。それは、外的認識の旅にも内的認識の旅にもアスランの存在が重要な関わりを持っている、という事だ。外的認識の旅がアスランの国に到達し、アスランに出会うことで完結を見るのと同様に、自分自身を正しく知るという内的認識の旅も、やはり、アスランを正しく認識するという行為ぬきには完結し得ない。このことに注目しつつ、子どもたちが自己認識を深めて成長していく過程を見て行くことにする。

議論を進める上で、焦点を以下の三点に絞って行きたいと思う。

- (□)ユースタスの自己認識
- (□)ルーシーの自己認識
- (□)カスピアンの自己認識

これは、『朝びらき丸 東の海へ』が大きく分けて三層の構造より成立していることに起因する。それぞれを第一部、第二部、第三部として少し説明を加えたい。

第1部 Chapter 1～Chapter 7

テーマは「ユースタスが回心に到る過程」である。場面は、ユースタスの家→「朝びらき丸」の船上→はなれ島諸島→大嵐→竜の島へ、と移動する。語り口は「ユースタス・クラレンス・スクラップという少年がおりました。」で始まり、「そして、たぶん、それ(=オクテシアン卿の腕輪)は今でもそこにかかったままでしょう。そして、ナルニアの世が終わるまでかかっているでしょう。⁴」で終わっており、昔話に特有の導入部と終結部を持っている。

¹ この論文は1986年10月4日、清泉女子大学で開かれた、日本 C.S. Lewis 協会第三回集会における口頭発表に訂正・加筆したものである。

² *Of Other World*, ed. By Walter Hooper (Harcourt Brace Jovanovich, 1966), p. 34.

³ *Ibid.*, p. 26.

⁴ *The Voyage of Dawn Treader*, (1952 ; rpt. London : William Collins Sons & Co Ltd, 1981), P.89. 以下、*The Voyage* とする。

第2部 Chapter 8～Chapter 12

テーマは「ルースイーを中心とした、未知の世界の正しき認識」とする。場面は、海蛇との遭遇→触れるものすべてを黄金に変える水のある島→声の島→暗闇の島へと移動していく。様々な危機の時にアスランがあらわれ「朝びらき丸」を救う。そのアスランの存在はまずルースイーによって認識される。

第3部 Chapter 13～Chapter 16

テーマは「カスピアの国王としての自己認識とすべての事の成就」とする。場面は、三人の領主の眠り続ける島→最後の海と不思議な海中世界→アスランの国へと移動する。謎が次第に解き明かされ、国王としてのカスピアの成長が完了し、結婚問題も扱われる。リーピーチーフはアスランの国に入り、子どもたちは、アスランと会った後、もとの世界に帰還する。

アスランは、第一部においてはユースタス、第二部においてはルースイー、第三部においてはカスピアの前に、それぞれ決定的な瞬間に現れて、その認識過程を完結させるのに、不可欠の役割を演じている。さて、本論に入る前に、今回は紙数の関係もあり、第一部を中心に話を進めることをここにことわっておきたい。

(□)ユースタスの自己認識

中尾セツ子氏は「この物語で最大の事件は、ユースタスの改心である」⁵という表現によって、この作品におけるユースタスの重要性を明らかにしている。

まず、

There was a boy called Eustace Clarence Scrubb...⁶

という文で、この作品は語り始められる。第二に、全体で約二百ページの作品の九十ページ位で、ユースタスの回心が一応の完結をみる、という構造になっている。第三に、ルイスはナルニア国シリーズにおいては、この作品で初めて「ユースタスの日記」という手法を採用し、語りの部分とは異なる視点からユースタスに焦点をあてている。最後に、そして最も大事なことののだが、この船旅において最初にアスランと出会うのはユースタスである。こうした事柄を総合すると、この作品の第一部のテーマは、ユースタスが回心に到る過程だということができる。

さて、Eustace Clarence Scrubb という名前だが、Eustace とはギリシャ語で「実り多き」とか「良き種の」の意であり、Clarence はラテン語の ‘Clare’ すなわち「光の・明るい」を語源にしている。しかし、Scrubb にいたっては、‘b’を一つとれば「つまらぬ、いやしい、ケチな人間、小人」といった意味がある。全体としては、first name と middle name がりっぱであるのに対し、last name が貧弱な、不安定な名前だと言える。ルイスが、「ほぼその名にふさわしい少年だったと言えよう」⁷と述べている事にも注意したい。

① ナルニアの海の中へ

ユースタスには友人がいない。標本になったかぶと虫なら大好きだという。レットルをはることで、そのものを理解したと錯覚するたぐいの少年であり、対象との本質的な関わり合いは持てない少年であることが暗示されている。

ユースタスの家に、いとこのペペンスイー家の兄妹、エドモンドとルースイーがやってくる。ユースタスは心秘かにほくそ笑む。とっ組み合いのけんかをしたらルースイーにも勝てないような貧弱な体格だが、自分の

⁵ 「詩人・作家としての C.S.ルイス」、山形和美編著『C.S.ルイスの世界』こびあん書房、1983年、p.107.

⁶ *Ibid.*, p.7.

⁷ *Ibid.*, p.7.

家でならいくらでも意地悪がしてやれると思ったからだった。

ルーシーとエドモンドが部屋で話をしていると、そこへユースタスがやってきて、いろいろとちゃちゃを入れる。突然、壁にかかっていた絵の中の海が溢れ出し、三人の子どもは波に飲まれる。そして、ナルニアの国に引き込まれる。ちょうど通りかかったカスピアン王の船に助けられるが、その船は、あの壁の絵に描かれていた船だった。

柳生望氏も指摘しているように、⁸子どもたちがナルニアの国へ引き込まれる様子はすばらしい筆致で描かれている。

ユースタスが絵の中の波を見た瞬間、波が本当にうねっているように見えたではありませんか。……見ていると吐き気がしてきました。……それと同時に、エドモンドのそばにおいてあった練習帳のページがめくればたばたと音をたて、舞い上がり、空中をすーっと後の壁の方へととんでいきました。そして、ルーシーは……自分の髪の毛が乱れ飛んで顔にかかるのが感じられました。……突然、風とともにさまざまな音が聞こえてきました。波の逆巻く音、船ばたを打つ波の音、船のきしむ音、そして、全体を包んで高く休みなく響く吹き荒れる風と波の音でした。でも、ルーシーが、これは夢じゃない、と心の底から感じたのは、香り、あの荒々しく塩からい磯の香りのせいでした。……額ぶちから溢れ出た、冷たく塩からい波しぶきをまともにかぶった三人は、ずぶ濡れで息もつけませんでした。……ユースタスの口の中に海水が飛び込みました。⁹

引用から明らかなように、作者ルイスは、この場面で子どもたちの五感を総動員させて臨場感を盛り上げている。視覚は勿論、触角、聴覚、嗅覚に訴え、最後には、ユースタスの味覚を通して、ナルニアの海を実感させている。口先ばかりで経験の蓄積のないユースタスは、いきなり海のただ中にほうり込まれ、海を全身で体験する。

感覚を総動員させて全身で実感するという認識態度は、これからユースタスがナルニアの世界で成長していく過程において、重大な意味を持つ。このことについては後で詳しく述べることにする。

② リーピーチーフとユースタス

海中から船にひき上げられたユースタスは、その年齢の少年にはふさわしくない、ひどい泣きかたをする。‘limerick’、‘assonance’などの難しい言葉は知っていても、¹⁰精神的には幼いことが明らかになる。彼は霊と肉体がつり合っていない。つまり、霊が年齢にふさわしい発達を遂げていないのだ。霊的にはまさに‘scrub’だといえよう。

ユースタスの霊的な歪みはリーピーチーフに対する態度にも明らかにあらわれる。「もの言うねずみ族」の長たるリーピーチーフを‘one of performing animals’と頭から決めつけ、嫌悪する。¹¹リーピーチーフの騎士道精神にのっとった言動はユースタスには、わざとらしい「ひけらかし」としか認識されない。¹²

ナルニア的世界の典型とも言うべきリーピーチーフに対するユースタスの認識態度には、自分の身に起こったことや自分がひきこまれた世界をありのままに受け入れることができない霊的未熟さが端的に示されている。

リーピーチーフとユースタスは様々な点で対照的だ。身体は小さいが、成熟した「気高い」¹³魂の持ち主であるリーピーチーフ。それに対し、つめこみ教育のために頭でっかちで、年齢にふさわしい霊的成長が伴

⁸ 『ナルニアの国は遠くない』新教出版社、1981年、p.94.

⁹ *The Voyage*, pp.11-12.

¹⁰ *Ibid.*, p.10.

¹¹ *Ibid.*, p.17.

¹² *Ibid.*, p.58.

¹³ *Ibid.*, p.81.

わないユースタス。尻尾で釣合をとりながら、揺れる船の上を自在に歩くりーピチープ。絶好の航海日和なのに船酔いして大げさに騒ぎだてるユースタス。

この対照性は、食事時にもめごとを起こしてとびこんで来た時の二人の態度にも明らかだ。大げさな言葉を使い、自分が先に手を出したくせに、まるで他者の責任であるかのごとくわめきたて、せっかくの食事を台無しにするユースタス。「あやつめがここへ逃げこむとわかっておりましたなら、徴らしめにはもっとふさわしい時まで待ちましたものを。¹⁴」と言って非礼を詫げるリーピチープ。

ユースタスはリーピチープの誇りとしている尻尾をつかんでふりまわし、からかおうとしたのだった。それはユースタスにとって‘delightful’¹⁵な思いつきだった。彼は、他者との **communication** の方法を知らない。いやがらせで関心を買うことしかできない。怒ったリーピチープが決闘を迫ると、自分からしかけた争いでありながら、「ぼくは平和主義だ。たたかいなんてくだらないよ。¹⁶」といて逃げようとする。いじなして、頭でっかちで、ものの本質が理解できていない。それでも相手がひき下がらないと、「あれは冗談、冗談も分からぬやつとはつき合えない。¹⁷」という。他者の心を傷つけて顧みることを知らない。結局あやまることになるが、それも心からではない。自分の立場が不利になると悟ったからである。

③ 奴隷市場のユースタス

フェリマス島についた時、ルーシーとエドモンドは、かつて自分たちが知っていた島であることから(何百年も時が過ぎているにも拘らず、)無人島のままであると即断する。カスピアンも判断を誤り、子どもたちとリーピチープだけで上陸し、奴隷商人につかまってしまう。ユースタスは「ただ、いまわしい船にいるよりはどんな所でもまだましだ。」¹⁸ という考えからついてくる。ルイスはここで、憎しみは人を更に悪い状態に追い込むことを示している。

万事休すと見えた事態だったが、カスピアンは的確な判断を下し、捜し求めていた七人の領主の一人、バーン卿の助けを得て、奇計によって総督を廃し奴隷売買を禁止する。総督のガンパスは奴隷売買を‘idea of progress, or development’であると強弁するが、カスピアンは取り合わない。¹⁹

ものいうけものや、もの言う木々たちが共存するナルニアの国にあって最も不似合な制度が奴隷制度である。奴隷制度の廃止というカスピアンのいさおしには、ナルニア国王として、面目躍如たるものがある。

一方、とらわれたままのユースタスは、こうなったのもすべて自分以外の他者のせいだとしてわめきたてる。しかし、彼が上陸したのも誰の強制でもない、自らの意思だった。カスピアンが奴隷市場にのりこんだ時、ルーシー、エドモンド、リーピチープには買手がついてしたが、ユースタスだけは売れ残っていた。おまけでつけてやると商人が言ってもひきとり手のいない、嫌われ者の存在だった。

王として名のりをあげ、奴隷売買禁止を宣言した後、「わが友はいずこに？」²⁰ と言ってユースタスを探すカスピアン、それに対して、「わかってるんだ、ぼくたちがとらわれていた間、君はどこかで羽根をのばしてたってこと。」²¹ と助けてくれた相手に悪態をつくユースタスは対照的である。ユースタスは肉体は奴隷状態から解放された。だが、自分の感情をコントロールできない、いわば、自我の奴隷といえる。ここには真の王者の心—‘magnanimity’—と奴隷根性‘slavishness’—の鮮やかな対比が見られる。

更に、ユースタス自身、自分が奴隷として、つまり、商品として最低であることを知った。傲慢な彼が、他者からどう評価されているかを知ったことは、自分に対する客観的視点が与えられたという事を意味する。これは結局ユースタスの成長にとって良い事だったといえよう。

¹⁴ *Ibid.*, p.29.

¹⁵ *Ibid.*, p.29.

¹⁶ *Ibid.*, p.30.

¹⁷ *Ibid.*, p.30.

¹⁸ *Ibid.*, p.34.

¹⁹ *Ibid.*, p.49.

²⁰ *Ibid.*, p.52.

²¹ *Ibid.*, p.52

④ 嵐とユースタス

離れ島諸島を出発した一行は、大嵐に見舞われる。マストは折れ、食糧は流され、水樽は穴があく。嵐から脱出するためにカスピアンをはじめとして乗員全員は必死で働き続ける。水と食糧は配給制となる。

このような非常時に、ユースタスは自分だけ配給分が少ないと不満を抱きながら、皆に協力せず、日記を書いている。漂流中の出来事はすべてユースタスの日記を通して語られることになる。

元来、日記は他者に見せるためのものではない。従って、そこには記者の事実認識の程度が如実にあらわれることになる。つまり、記者のありのままの姿がさらけ出される。

ユースタスは乗船した時から日記を書き始めていた。そこには‘ghastly’、‘frightful’、‘rotten’などの醜い言葉が並び、カスピアンやエドモンドに対する憎悪が満ちている。²²

ユースタスは上天氣を嵐と誤認するほどに事実を認識する力が未熟なのだが、²³日記には、他者を批判して「一般の人間の取りがちな最も臆病な行為は事実から眼をそむけることだ。」²⁴などと書き込む。ユースタスは実は自分自身が「事実から眼をそむけ」ていることに気づかない。

ユースタスの水に対する認識不足は圧巻だ。彼は「発汗によって体温は下がる。ゆえに働けばそれだけ水は必要とされなくなるだろう。」と日記に書いている。²⁵つまり、殆ど働いていない自分が一番水を必要としている、という理論になる。驚くべきことは、ユースタスが大まじめで日記をつけているということだ。自分では詭弁だとか強弁だという意識がまったくない。

ここから明らかなのは、ユースタスがおそらく今まで一度も働いて汗を流した経験がない、ということだ。彼の受けてきた教育の実態が察せられる。

他者に対して哀れみや思いやりの気持ちを抱いたことがないユースタスには、ルーシーが食事や水を自分に分けてくれる理由が理解できない。「なにか下ごころがあって取り入ろうとする」のだと解釈し、それを止めるエドモンドを「おせっかいやきの気取り屋」とののしる。²⁶ユースタスは人の善意を認識できず、ルーシーを正しく認識できない。

そして、遂にユースタスは、皆が疲労のために熟睡している間に、口実をもうけて水を盗みに行く。リーピーチーフにみつかってもあくまでも自分を正当化しようとする。船中で、水が不足している時にそれを盗むのは死罪にもあたる行為だ。それを許し悟そうとする、王者にふさわしい態度をもったカスピアンを、ユースタスは「いやらしい傲慢な気取り屋め！」と日記の中で罵っている。²⁷自分の感情や欲望を制御できない自我の奴隷である様子が、ここであます所なく露呈される。まさに貪欲と傲慢と利己主義の権化であるが、そうした自分の醜さをまったく認識できない。霊的な意味で小人である。

ユースタスの持つ「事実を照らす鏡」——認識力——は歪んでいる。そのために、そこに映る像はすべて歪んだものとなる。リーピーチーフは「芸をするけだもの」、ルーシーは「下ごころのある女の子」、カスピアンとエドモンドは「鬼」²⁸、そして自分だけは「冷静かつ沈着」²⁹というわけだ。

⑤ 竜の島とユースタス

漂流の果てに「朝びらき丸」はようやく島にたどりつく。到着したその日、一休みした後で、皆はすぐさま仕事に取りかからねばならない。船のいたみはそれ程に激しかった。

しかし、この話にうんざりしたユースタスは一人だけこっそりと隠れて眠ろうとする。嵐の際中から暗示され

²² *Ibid.*, pp.27-28.

²³ *Ibid.*, p.24, p.27.

²⁴ *Ibid.*, p.27.

²⁵ *Ibid.*, p.59.

²⁶ *Ibid.*, p.59.

²⁷ *Ibid.*, p.60.

²⁸ *Ibid.*, p.61.

²⁹ *Ibid.*, p.59.

ていたがユースタスの急情な側面があらわとなる。ユースタスの中には七つの大罪—‘the seven deadly sins’—の大半、‘pride’、‘covetousness’、‘anger’、‘gluttony’、‘envy’、‘sloth’が相互に関わり合いながらうごめいている。皆から離れ、仲間が働いている時に一人安逸をおさぼるのがこの時のユースタスにとっては ‘delightful idea’ だった。³⁰

山に入ったユースタスは生まれて初めて孤独の寂しさを感じず。戻ろうとして霧の中で道に迷う。やがて、霧が晴れ、自分のいる場所が ‘utterly unknown’ であることを悟る。³¹ 見たこともない得体の知れぬものが姿をあらわすが、ユースタスには、それが竜であることは認識できない。竜は水を飲んだ後、一声さけんで痙攣を起こして死ぬ。安心して水を飲んだ時、大雨が降り出しユースタスはほら穴へ逃げこむ。そこは宝蔵であった。ユースタスは何気なく腕輪を一つとってはめる。ポケットにダイヤモンドをつめて、やがて眠気に襲われて眠る。腕の痛みのために目をさますと、いつの間にか腕がふくれあがって腕輪が食い込んでいる。実は、眠っている間に竜になってしまったのだが、ユースタスにはそれはまだ分からない。

自分が竜になってしまったことを認識するまでのユースタスを描く作者 C.S.ルイスの筆致は冴える。ユースタスは自分のそばの地面にうつった巨大な竜の前足の影を見ておそれおののき、ほら穴に別の竜がいたのだと思う。その影は、ユースタスが自分の手を動かすと同時に動く。ユースタスが息をはけば煙が立ちのぼり、息をひそめれば煙も止まる。逃げようとしてあたりを窺うと、反対側にも竜の足が見える。これは彼の左前足なのだがもう一匹竜がいたと思ったユースタスは恐怖の余り涙を流す。そして、涙の粒が余りに大きく熱いことに驚く。自分の両側に二匹の竜がいて、しかも自分の真似をしていると思い込んだユースタスは逆上してほら穴から逃げ出す。やっと水辺にたどりついて気づいたのは自分が腹這いのままで逃げたことだった。そして水面に映った自分の姿を見たユースタスは初めて真実を悟る。自分は竜になってしまったのだということ。このことをルイスは、

...he realized the truth.³²

と簡潔に述べている。

重要なのは、ユースタスの自己認識の過程そのものである。彼は既に竜を見た。しかし、その名前は知らない。彼は腕の痛みのために眠りから醒めた。それから、竜の影を見て、竜の息をして、竜の涙を流し、竜の走り方をして、最後に水面に映った姿を見て自分が竜になったことを認識する。つまり、感覚的機能を総動員させて、全身を使って、竜としての自分を実感する。そして、「竜」という名称を知るのは仲間のもとへ戻ってからだった。³³ 具体的体験を経た後にその名称を知るという認識方法は、レッテルはりや点数獲得にあけくれてきたユースタスにとっては画期的といえよう。彼は ‘Republican’³⁴ とか ‘pacifist’ などと口にするが、その本質を知らぬ少年だった。それが、痛みから出発することで正しき自己認識の道を今歩み始めた。

⑥ 仲間のところに戻ったユースタス

肉体が醜い竜の姿になって初めて、ユースタスは正しき自己認識の第一歩を踏み出す。以前の自分がりっぱな人間だったかどうかをあやしみ始め、エドモンドやカスピアンが友人だったことを悟る。自分だけでなく他者をも正しく認識できるようになった。

そして、キャンプに戻るが、自分がユースタスであることは容易に分かってもらえない。他者に自分を正しく認識してもらい難しさをここで悟る。

あれほどいやがらせをしたのに、リーピーチーフはユースタスを慰め励ましてくれた。ユースタスはリーピーチーフの気高さを知る。

³⁰ *Ibid.*, p.62.

³¹ *Ibid.*, p.66.

³² *Ibid.*, p.73.

³³ *Ibid.*, p.84.

³⁴ *Ibid.*, p.28.

さて、ユースタスは自分の姿を恥じながらも、船のマストにするための大木をひき抜いてきたり、寒い日に皆の体をあたためたり、食料を調達してきたりするうちにすばらしい経験をするようになる。それは「他者に愛されるという喜び、そして、さらにすばらしい、他者を愛するという喜び」³⁵を知ったことだった。これは、ユースタスにとっては初めての経験であり、彼を絶望の淵から救うものだった。

以前のユースタスにとっては‘delightful’の意味する所は他者にいやがらせをしたり、一人だけでずるいことをすることだった。それに比べると、ここにはユースタスの驚くべき成長が見られる。

また腕にくいこ腕輪の痛みは、良心の痛みを象徴するとも考えられる。これも以前のユースタスにはなかったものである。そして、彼は乗船して以来、自分がずっとひどいやっかい者であったこと、しかも、今は一層やっかいな存在になっている事を認識する。

⑦ アスランとユースタス

仲間を愛し仲間に愛される喜びを知り、自分を恥じることを知り、仲間のためにひたすら尽くす努力を続けるユースタスの前にアスランが現れる。作者ルイスは、アスランとユースタスの出会いという、第一部のクライマックスを、エドモンドを聞き手とするユースタスの回想という形で描く。

ユースタスの前に現れたアスランはユースタスの目を凝視して、山上の泉に導く。泉に入る前に古い衣服を脱がなくてはならないと言われたユースタスは竜の皮を三度ひきはがす。しかし、それでもまだその下には固い竜のうろこがあった。それをアスランが引き裂く時、「傷は心臓まで達したか」³⁶と思われる程だった。しかし、竜の皮がはがれていく感覚的「喜び」³⁷を知ったためにユースタスは傷の痛みに耐えることができる。そして、その後には、みずみずしい若枝のようなユースタスの身体があらわれる。

And there was I as smooth and soft as a peeled switch and smaller than I had been.³⁸

(イタリクスの部分論者による。)

ユースタスのこの言葉には‘s’音で始まる四つの単語が含まれており、頭韻による音響的効果が著しい。若枝のしなやかさと柔らかさ、そしてやさしさが聴覚を通して読者に訴えかけてくる、若枝のやわらかさは竜のうろこの固さとは対極にあるといえよう。

古い自分を脱ぎ捨てる痛みと喜びを知ったユースタスをアスランは泉に投げ入れる。一瞬の激痛のあとには何ともいえぬ甘美さがおとずれる。泉の中をユースタスは幼な児のごとく無邪気に泳ぎまわる。

...it became perfectly delicious and as soon as I started swimming and splashing I found that all the pain had gone from my arm.³⁹

(イタリクスは論者による。)

‘s’音の響きはここまで引きつがれ、ユースタスの不思議な体験を描くのに効果的に働いている。あれほどユースタスを悩ませた腕の痛みはすっかり消えていた。やがて泉からユースタスをひき上げると、新しい衣を着せ、キャンプ近くに戻してアスランは消え去る。

この場面の意味するところを柳生望氏は明快に述べている。

これはバプテスマ(洗礼)による新生を象徴する。つまり少年の罪が潔められ、新しき人となったことをあらわす。水を潔めの象徴として用いるのは、それが潔める力を有するからである。水は伝統的に死と生に関係し、水に浸し水から上がることは再生を象

³⁵ *Ibid.*, p.81.

³⁶ *Ibid.*, p.86.

³⁷ *Ibid.*, p.86.

³⁸ *Ibid.*, p.86.

³⁹ *Ibid.*, pp.86-87.

徴する。水のイメージはこの出来事にキリスト教的象徴、つまり浸礼と再生の意味あ
いを与える。⁴⁰

ユースタスは新しき人として生まれ変わったのだ。

ユースタスの新生はアスランの愛の業にもよるものだった。だが、ユースタス自身の努力も忘れてはならない。竜になった彼はひたすら仲間のために尽くしている。自分の利益でなく、仲間のために。そして、ユースタスができる限りの努力を続ける時、そこにアスランが現れる。救いは、救われるもの(ニユースタス)と救い手(ニアスラン)のいわば相互作用の上に成り立っている。

このことは、竜の皮をひきはがすという行為に象徴的にあらわされている。ユースタスが自分自身の手で三度竜の皮をひきはがすという努力をしてこそ、そこにアスランとが関わっていく意味がある。自分で救われるための努力をしないものは、アスランにも救うことはできないのではないだろうか。

この作品においても、やはり、行為者が限界まで努力し、そこにアスランが関わっていくことによって、その行為が完遂される、というナルニア国における約束が生きている。⁴¹

⑧ エドモンドとユースタス

話をじっと聞いていたエドモンドは、ユースタスの体験が夢などではないことを告げ、「君はアスランと会ったんだと思うよ。」⁴²と言う。

ここで大事なことは、ユースタスはあの「巨大なライオン」、竜であってさえも「おそろしい」⁴³と思わざるを得なかった存在の名を初めて知った、という事である。エドモンドからその名を告げられてようやく、ユースタスはアスランを正しく認識するという行為を完了するに到る。

既に指摘したように、竜に変身した時点ではユースタスは、「竜」という名称を知らなかった。変身する以前に別の竜の姿を見ていたために、自分がその怪異な存在になったことは分かった。しかし、それまでユースタスが読んだ本は竜のことなど書かれていないものばかりだった。自分が竜としての生を生きながら自分が何者であるか知らなかった。ユースタス自身が認めているように、自分が「竜」という存在であることを知ったのは、キャンプへ帰って仲間たちがその名で自分を呼んだからだった。そして、竜になったユースタスが自分で竜であることを認識し始めた時、自分の仲間たちを正しく認識し、以前の自分がどのような存在であったかを正しく認識し始めたのであった。

同様に、アスランとの出会いにおいても、ユースタスは自分を導き新たな生を与えてくれた偉大な存在の名を知らない。仲間であるエドモンドの口から聞いて初めてすべてを悟るのである。

以前のユースタスはレッテルをはることで事足りりとする種類の人間だった。その傲慢で頑なな態度からは血の通った関係は生ずるはずもなく、ユースタスは自分の心そのままを象徴するごつごつと固い皮をもつ竜の姿になったのだった。

しかし、竜になってからのユースタスの認識方法は以前とはまったく異なっている。痛みと苦悩と恥に苦悶しつつ彼は全身で竜としての生を生きる。また、アスランとは霊的にもっと深い部分で関わり合う。そして、どちらの場合も、自分の全身で関わり合って、後に初めてそのものの名を認識する。すなわち、名称を知るという作業を完結させることになっている。この認識過程こそ、ユースタスに最も欠けていた、そして、最も必要とされていた認識方法だったといえよう。

アスランを相互理解の共通基盤とすることができた時、エドモンドとユースタスの間に真の友情が芽生

⁴⁰ 『ナルニアの国は遠くない』p.98.

⁴¹ 拙論、「『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長—その1『ライオンと魔女』におけるエドモンドの成長—」『東京成徳短期大学紀要』第 18 号(昭和 60 年 3 月)及び、「『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長—その2『カスピアン王子のつるぶえ』もにおける霊的相剋と肉体的闘争—」『東京成徳短期大学紀要』第 19 号(昭和 61 年 3 月)を参照いただきたい。

⁴² *The Voyage*, p.87.

⁴³ *Ibid.*, p.84.

える。「いいかい、秘密だよ。君はただ阿呆だっただけだけど、ぼくときたら裏切り者だったんだ。」⁴⁴と打ち明けるエドモンド、それに対し「そんなら、その話はしなくていいよ。」と答えるユースタス。

ユースタスの体験の聞き手として最もふさわしいのはエドモンドである。『ライオンと魔女』、『カスピアン王子のつるぶえ』の読者にはそれが分かる。そして、最低の人間だったエドモンドが現在のエドモンドに成長するまでに、どのような努力と体験を積み重ねてきたことか。⁴⁵今のユースタスにはそれが理解できた。わずかに数行のエドモンドの言葉で理解できた。それだけの体験をユースタス自身が経てきたからだ。

アスランを知っているか、と尋ねられて、「そうだね—アスランがぼくのことを知っているといったほうがいいね。」⁴⁶とエドモンドは謙虚に答える。ここには、アスランを正しく認識し、自己を正しく認識する者、すなわち、アスランとの自己との関係を正しく認識する者の姿が描かれている。

この作品においてはエドモンドは目立った動きはあまりしない。しかし、重要な役割を担っている。その一つは、ユースタスの先達という役割だ。古き自分の似姿をユースタスの中に見て、敢えて古傷をさらしてユースタスを慰め励ました。こうしたエドモンドの姿は、新しき人となったユースタスにとって一つの範例となり、これからの人生行路の指針となる。

⑨ 結び

以上から明らかなように、ユースタスにとって自己を正しく認識する過程は、そのまま、アスランを正しく知る過程でもあった。Self-knowledgeとthe knowledge of Aslanの関係は非常に緊密だ。自分自身を正しく認識した時にユースタスはアスランと出会い、古い自分、自我の奴隷であることを象徴する竜の衣を脱がされ、霊的に自由な人となるべく方向づけられたのだ。自分を正しく認識すること、自分と外的世界との関係を正しく認識すること、そして、絶対者アスランを正しく認識することは、この作品においては、一つのことに三つの側面として語られていると結論してよいだろう。

さて、この認識過程において「水」のイメージの果たす役割は大きい。これについて簡単に述べていくことにする。

まず始めにユースタスをルーシーやエドモンドとともにナルニア国にひきこんだのは波だった。寝室にかけてあった一幅の絵の中の波があふれ出し、三人は海中にさらわれた。助けられて船中の人となったにも拘らず、ずぶぬれのユースタスはおいおいと泣き出して自分の霊的な幼さを露呈する。

第二に、飲料水としての水が問題となる。嵐のために食料も水も不足している時に、ユースタスはただ一人喉のかわきに耐えられず水を盗もうとする。ここで、彼の貪欲さ、傲慢さ、利己主義が露呈される。

第三に真実を映す鏡としての水の働きがある。ユースタスは水面に映った自分の姿を見て、竜になってしまったことを悟る。

第四に、新生の具としての水の働きがある。これについては先に詳しく述べたのでここには繰り返さない。

このように、水はユースタスの自己認識を促す上で大きな役割を果たしていることが明らかとなる。そして、実は、水のイメージはこの作品全体をも貫く支配的なイメージの一つとなっている。

ここで改めてユースタスの名前に論を戻そう。Eustaceがギリシャ語で‘fruitful, of good grains’の意であることは既に指摘した。話をふりかえてみると、冒頭のルイスの「その名にふさわしい少年だった。」という言葉にも味わい深いものがある。初め確かに霊的な「小人」であったユースタスが、結局は「良き種」であったことがここに到って明らかとなったからである。

更に、Clarenceのもつ「光」という意味について考えたい。なぜなら、「光」のイメージは「水」のイメージと並んでこの作品において重要な働きをしているからである。そして、もちろん、ユースタスの認識過程も、光のイメージ抜きには語れない。

既に述べたように、ユースタスは自分だけ楽をしたために、そうとは知らず竜のほら穴のある山にはいつ

⁴⁴ Ibid., p.87.

⁴⁵ cf.「子どもたちの成長——その1」、「子どもたちの成長——その2」

⁴⁶ Ibid., p.87.

いった。そして、霧のために道に踏み迷う。やがて霧は晴れて光が射してくる。

光は刻一刻とまばゆさを増し、ユースタスの目は眩みました。霧は晴れました。ユースタスはまったく見知らぬ谷間にいました。どの方角にも海は見えませんでした。⁴⁷

まばゆい光はユースタスに現在の自分の立場を示してくれる。この場所はユースタスが自己を改革する第一歩を踏み出す記念すべき場となる。引用部分は、ユースタスの霊的覚醒が始まることを、端的に象徴しているといえよう。

また、眠りから覚めたユースタスの上には月光がさしている。彼は、月光のおかげで自分が竜になったことを認識する。

さらに、ユースタスを新生に導く「巨大なライオン」については、「昨夜は月も出ていなかったのに、そのライオンのいる所だけは月光に照らされていたんだ。」と語られる。⁴⁸

そして、すべてを理解し合ったユースタスとエドモンドがしばし沈黙にひたっていると、明けの星が消えて、二人を包む世界は「ばら色」に変化して行く。夜が明けたのだった。⁴⁹

このように、光のイメージはユースタスの認識過程に深く関わり合いを持っている。そして、闇から光へというパターンは、この作品の中で何度も繰り返されて、「未知」の存在を「既知」の存在へと変化させていく子どもたちの認識の深まりと軌を一にしているのである。

光のイメージは、船がアスランの国に近づくに従って強さを増し、最終的には「アスランのたてがみからほどばしる光」⁵⁰の中に集約されていく。

「良き種を持つ光の小人」であったユースタスは、ナルニアの地で、アスランによって水をそそがれ、アスランの光をうけて育ち「若枝」のごとき少年に成長していく。その成長とは、アスランを正しく知ることによって、自己を知り、他者を知り、自分を取り巻く世界を知ることであった。あらゆることに対する正しき認識はアスランに対する正しき認識に集結されていくのだった。

後篇に続く

⁴⁷ *Ibid.*, p.66

⁴⁸ *Ibid.*, p.84.

⁴⁹ *Ibid.*, p.87.

⁵⁰ *Ibid.*, p.187.